

聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例

その他（別言語等）のタイトル	Structural Analysis of 5 Stories at the Beginning of the Book of Genesis : The Reversal Structure not Based on Ikyo-houmon-tan
著者	大喜多 紀明
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	15
ページ	195-216
発行年	2017
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009513

聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造 異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例

大喜多 紀明

Structural Analysis of 5 Stories at the Beginning of the Book of Genesis: The Reversal Structure not Based on *Ikyo-houmon-tan*

Noriaki OHGITA

要旨：従来、裏返し構造は、異郷訪問譚にみとめられる構造上の「共通の約束」と見做されてきた（大林 1979）。一方、大喜多（2016）では、異郷訪問譚以外の形式での裏返し構造の事例が、いくつかのアイヌ口承文芸テキストにおいてはじめて見いだされた。異郷訪問譚ではないいくつかのアイヌ口承文芸テキストに裏返し構造が見いだされた理由に関し、大喜多（2016）では、アイヌ民族における交差対句を好む心性に起因するのではないかという仮説が提示された。本稿はこれを踏まえ、アイヌ民族を話者とするテキスト以外で、これと同様に交差対句が頻用される特徴を有するテキストである聖書テキストに注目することにより、大喜多（2016）の仮説の検証を行った。なお本稿では、聖書の「創世記」の冒頭に収納された5編の物語をテキストとした。本稿の検証によれば、テキスト5編中、異郷訪問譚ではない4編の内の3編が裏返し構造により構成されていることが確認できた。この結果は、上述の仮説を支持するものである。

キーワード：裏返し構造 異郷訪問譚ではない形式 物語構造 創世記

1. はじめに

裏返し構造とは、ルーマニアのフォークロリストであるミハイ・ポップ（以下、「ポップ」と呼ぶ）がルーマニアの民話「兵士としての少女」に見いだした構造である¹。この

¹「兵士としての少女」に見いだされた構造に関しては、『Folclor Literar』（1961年）に掲載されたポップの「Metode noi in cercetarea structurii basmelor」が初出であるが、筆者はこれを手に入らなかった。その代わりとして筆者は、当該箇所が掲載されたPop（1990）を取り寄せた。

ポップの知見をもとに、大林(1979)は、いくつかの日本の異郷訪問譚に裏返し構造²を当てはめ、大林(1979)でとりあげた物語³にも裏返し構造が適用できることを確認した⁴。そのうえで大林(1979:8-9)は次のように述べた。

私は小論において、日本文学から口承文学にもとづくと思われる異郷訪問譚の例をとり上げ、そこには共通の約束があることを論じた。もちろん、これは日本の異郷訪問譚のごく一部にしか過ぎない。日本文学上の他の作品、また現在の昔話や伝説における異郷訪問譚にも、同様な構造がみられるかどうか、また異郷訪問譚以外にも、どのような説話にこの構造がみられるか、さらにこのような構造をもたない異郷訪問譚は、どのような構造をもっているのか、の検討は今後の課題である。

つまり大林(1979)は、裏返し構造を異郷訪問譚にみとめられる構造上の「共通の約束」と推認した。その一方、異郷訪問譚以外の形式による物語にも裏返し構造を持つ事例はあるか、裏返し構造によらない異郷訪問譚ははたしてどのような構造か、に関する検討を今後の課題ともしている。

大林(1979)が提起した異郷訪問譚以外の形式による物語にも裏返し構造を持つ事例がはたして存在するかの課題について、アイヌ口承文芸である「ポヌンカヨ-88」「いびきの話-89」「人食いおばけ」「氷の上で」を大喜多(2016)では提示し、これらは異郷訪問譚ではないにもかかわらず、裏返し構造により構成されていることを示した⁵。その際、大喜多(2016)では、勝俣(2009)を前提とした異郷訪問譚の特徴に基づくことにより、上述した4編のアイヌ口承文芸が異郷訪問譚ではないことを判別した。

異郷訪問譚によらないアイヌ口承文芸に裏返し構造が見いだされたことについて、大喜多(2016)では、そもそもアイヌ民族を話者とする口頭テキストには交差対句が頻繁にみとめられる点⁶に注目し、これを裏返し構造が発現する一因と見做した。つまり、交差対句を好む心性が裏返し構造を発現させる一因であるとの仮説⁷を提示した。一方、大喜多(2016)では、ひとえに4例が示されたに過ぎず、この仮説は、アイヌ口承テキスト以外のテキストで検証された訳ではない。

そこで本稿は、上述の仮説を検証することを目的とし、アイヌ口承文芸テキスト以外のテキストとして聖書テキストをとりあげ、これに、異郷訪問譚ではないにもかかわらず

²裏返し構造は大林の命名であり、大林(1979)、依田(1982)、大喜多(2014)、大喜多(2016)などで使用された用語である。この構造については、本稿4節で説明する。

³大林(1979)でとりあげられた物語は「イザナキの黄泉国訪問譚」、「神功征韓譚」、「浦島子」、「甲賀三郎」である。

⁴韓国のいくつかの異郷訪問譚が裏返し構造からなることを示した論文には、加藤(1979)や依田(1982)がある。

⁵異郷訪問譚以外の形式での裏返し構造の使用を確認した最初の報告である。

⁶アイヌ口承テキストに交差対句が頻用されることを示す報告には、例えば、大喜多(2012)、大喜多(2013a)などがある。

⁷本稿ではこれを「仮説」と呼ぶ。

ず裏返し構造がみとめられる事例が見いだされるか、の検証を行うこととする。

なお、聖書テキストには交差対句が頻繁に見いだされることが知られている(例えば、Breck (1994)、森 (2001) など)。このことから、本稿の検証を行う際、聖書テキストは相応しいものであると筆者は判断した。ちなみに、聖書テキストから抽出された交差対句は、しばしば、聖書解釈に活用されてきた⁸。これは聖書テキストに使用される主要な修辞技法の一つが交差対句であることを示唆している。

本稿では、聖書テキストのなかでも、とりわけ、『聖書』⁹「創世記」¹⁰に収納された冒頭の5つの物語をテキストとし、これらの構造分析を行うこととする。なお、冒頭の5つの物語とは、「創世記」の巻頭に配置された5つの物語であり、巻頭から順に、「天地創造」物語、「失樂園」物語、「カインによるアベル殺害」物語、「ノアの箱舟」物語、「バベルの塔」物語と配列している¹¹。なお、筆者が上述の5つの物語をテキストとして選択した理由は、ひとえに、聖書の冒頭に記載されたテキストであるという点と、これらが一般にも知られた物語である点による。

本稿の検証に際し、まず2節では、大喜多(2016)で採用した、勝俣(2009)の知見に基づく異郷訪問譚の定義を提示した。そのうえで、本稿における交差対句の定義を3節に、裏返し構造に関する定義を4節に示した。さらにこれらの定義を踏まえ、交差対句と裏返し構造との関係についての本稿での見解を5節で述べた。以上は本稿の検証に際する定義上の前提である。

検証は以下に示すように進めることとする。まず、6節でテキストの範囲を確認したのち、7節では各テキストのあらすじを述べる。そのうえで、それぞれが3節の異郷訪問譚の定義に合致するかを8節で確認することとする。これを踏まえ、9節において、各テキストを裏返し構造の定義と照合することにより構造を判別するというものである。

なお、本稿の直接の先行研究は大喜多(2016)である。

2. 異郷訪問譚

異郷訪問譚とは一般的には、主人公が異郷へと訪問する形式の物語を言うのだが、定義が明確になっている訳ではない。そこで本稿では、大喜多(2016)に記載された、勝俣(2009)を踏まえた異郷訪問譚の定義を採用し、これを本稿での異郷訪問譚の定義とする。

大喜多(2016)では、次に示す から のすべての特徴に符合する形式の物語を異郷訪問譚と称した。

⁸例えば、渡辺(1980)、左近(1992)、森(2001)、前川(2012)などがある。

⁹本稿では『聖書』(いわゆる口語訳聖書)日本聖書協会1989年版(日本聖書協会(1989))を使用した。

¹⁰「創世記」は「旧約聖書」に収納された最初の巻である。

¹¹ここで示した物語の名称は筆者が便宜上付けたものである。

- ：異郷訪問譚は、訪問者が訪問者にとっての異郷を訪問する形式の物語である。
- ：訪問者は「カミ」か「人間」である。
- ：訪問者は、特殊な方法・手段により、異郷を訪問する。
- ：選ばれた者しか異郷を訪問できない。

本稿では、上述の から の特徴のすべてを満たす物語を異郷訪問譚とする¹²。

3. 交差対句

交差対句とは、構文に見られる修辞技法の一種である。例えば $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$ で表されるように、複数の「語」・「句」・「節」の対があたかも合わせ鏡のように配列する形式は、「キアスムス」、「交差配向法」、「対称構造」、「多層的交差配列」、「逆並行法」、「交差対応的配列法」、「集中構造」などとも呼ばれる¹³が、本稿ではこれを便宜上「交差対句」と呼ぶこととする。なお、例えばAとA'のような交差対句を構成する対のことを本稿では「対応」と呼ぶ。交差対句は、聖書全般で好んで使用される修辞技法の一つ¹⁴である（例えば、Breck（1994）、森（2001））。

なお、交差対句には語句単位が対応した程度の小規模のものから、一つの物語を覆う程度の規模のもの、巻全体にわたる大規模のものなどがある。小規模の交差対句の実例としては、例えば、左近（1971）は『旧約聖書』「詩編」29篇6節における事例をとりあげている。この箇所は、口語訳聖書（日本聖書協会（1989：770））では以下のように書かれている。

主はレバノンを子牛のように踊らせ、
シリオンを若い野牛のように踊らせる。

対し、当該箇所について、左近（1971：49）は、当該箇所のヘブライ語による原典の語順に基づき次のように書いた¹⁵。

おどらせる / 子牛のように / レバノンを
シルヨン¹⁶を / 若い子牛のように

¹²本稿では便宜上、勝俣（2009）を踏まえた異郷訪問譚の定義を採用し、本稿での分析を行ううえでは から の特徴のすべてに当てはまるかどうかを判別の尺度とした。なお、より異郷訪問譚のかどうか（例えば、4つの特徴の内の1から3つが当てはまる場合など）という異郷訪問譚としての程度と当該物語の構造との関連については今後検討すべき課題であると筆者は考えている。

¹³この修辞技法に関する現時点での定まった名称はない。

¹⁴聖書で頻用される他の修辞技法には並行法などがある。

¹⁵本稿ではこれを「左近訳」と呼ぶ。なお、左近訳中の「/」は、左近が記したものである。

¹⁶口語訳聖書（日本聖書協会（1989））の当該箇所に書かれた「シリオン」は、左近訳では「シルヨン」となっているが、双方は同じものであり、ヘルモン（地名）のことを指している。

そのうえで、左近（1971：49）は、「子牛のように」と「若い子牛のように」とが、「レバノンを」と「シルヨンを」とが対応していると述べ、これを交差対句の事例と解釈した。なお、「詩編」29篇にみとめられる小規模の交差対句の事例について、左近（1971：49）では上述のもの以外にもさらに2例が紹介されている。

一つの物語を覆う程度の規模のものとしては、例えば、森（2007）に掲載された「創世記」17章1節～27節の「アブラハムの契約」物語や、「創世記」22章1節～19節の「イサク奉献」物語の交差対句などがある。さらに、大規模なものとして、森（1996）では「ローマ人への手紙」、森（2007）では「ルカによる福音書」、村井（2009）では「マルコによる福音書」に関し、一つの巻全体を覆う交差対句がそれぞれ紹介されている。

4. 裏返し構造

ポップが提示した「兵士としての少女」の構造を踏まえ、大林（1979：1）は、裏返し構造の特徴を以下のように説明した。

それによれば、この昔話はいわばその前半と後半とが裏返しの関係になっている。つまり、前半で問題となったいくつかのテーマが、後半においては前半とは逆の順序で次々に展開し、かつ同じテーマが問題になっていても、後半ではいわば前半の否定ないし対立というような形をとっている。たとえば、欠如というテーマが前半に出てくると、後半では欠如の除去という形になっている。早く言えば、ポップの方法は、構造分析における syntagmatic な見方と、paradigmatic な見方の双方を統合する試みと言えよう。

これを踏まえ、本稿の直接の先行研究である大喜多（2016）では、以下の A および B を裏返し構造の特徴とした。

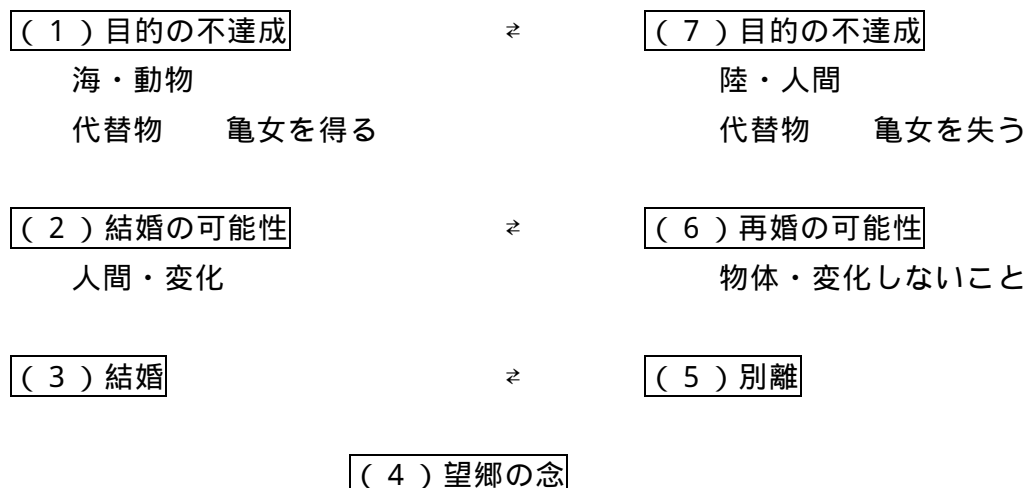
A：物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する。

B：物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する。

本稿もこれに準じ、上述の A・B を「裏返し構造の特徴」と称することとする。

以下、実際に裏返し構造がどのような構造なのか、および、特徴 A・B がどのように当てはめられるか、を例示する目的で、大林（1979）に掲載された「浦島子」¹⁷の構造を示したうえで、これが特徴 A・B と合致することを述べることにする。

¹⁷大林（1979）では「浦島子」を異郷訪問譚と見做している。



この図式で示した対応に関する説明として、例えば(1)と(7)については、大林(1979:6-7)は次のように述べている。

ここでは、一において海で魚を得ようと思ったのに得られなかったのに対し、陸上で会いたいと思った人間に会えなかったことが対応している。期待したものが得られなかったというテーマにおいては共通しているが、海上と陸上、動物と人間という相違がある。さらに一においては、魚のかわりに浦島子は亀を得ている。ところが七においては、彼は会いたい故郷の人に会えなかったばかりか、その代替物を得ることもなく、逆に亀女との再会の可能性も失ってしまうという相違がある。

大林(1979)では他の一連の対応も説明されており、「浦島子」が裏返し構造であることを述べている。この物語を上述の特徴AおよびBに照合した場合、(1)は(7)と、(2)は(6)と、(3)は(5)と、「対照」的な関係である(特徴A)。また、後半要素(7)(6)(5)は、前半要素(1)(2)(3)と対応しているため、後半の配列順序は前半の逆の順番である(特徴B)。したがって、「浦島子」は特徴AおよびBに合致することがわかる¹⁸。

5. 交差対句と裏返し構造の関係

本節では3節で示した交差対句の特徴と4節で示した裏返し構造の特徴との関係を論じたい¹⁹。両節で示した特徴を比較した場合、3節に示した、交差対句における「複数の「語」・「句」・「節」の対があたかも合わせ鏡のように配列する形式」は、まさに「物語

¹⁸「浦島子」の場合、物語の転回箇所に、対応を持たない要素(本稿ではこれを「核」と呼ぶ。「浦島子」の場合、核は(4)である)が出現する。裏返し構造の場合、こうした、核があるものとなないものがあるのだが、本稿では、核の有無による構造の種類の切り分けをしないこととする。

¹⁹大喜多(2013b)では、裏返し構造が交差対句の一種である点が述べられている。

の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する」(特徴 B) のであるから、両者は言い方が違うだけで、3 節で示した交差対句の特徴は、4 節に示した裏返し構造の特徴 B と同じ意味である。

一方、裏返し構造の特徴 A では、裏返し構造の場合、要素どうしは、「否定」・「対立」・「対照」のいずれかの関連を持つ。つまり、対応のすべてが「否定」・「対立」・「対照」の内のいずれかの関連²⁰にある交差対句を、本稿では裏返し構造と見做すこととする。

6. テキスト

本稿のテキストは、聖書「創世記」の冒頭に収納された 5 つの物語である。掲載順でこれを示すと、「天地創造」物語(「創世記」1 章 1 節~2 章 3 節)、「失樂園」物語(「創世記」2 章 4 節~3 章 24 節)、「カインによるアベル殺害」物語(「創世記」4 章 1 節~4 章 16 節)、「ノアの箱舟」物語(6 章 11 節~9 章 19 節)、「バベルの塔」物語(11 章 1 節~11 章 9 節)である²¹。なお、物語 と物語 、物語 と物語 、物語 と物語 の間には系図の記載や短い挿話²²があるのだが、本稿ではここでの系図の記載や短い挿話に関する分析を行わないこととする²³。

7. あらすじ

本節では、物語 から に関する筆者によるあらすじを示す。なお、それぞれのあらすじには、テキストを区分するため、筆者による記号・数字を付した。例えば後述の 7.1. 節では「天地創造」物語のあらすじを示したのであるが、筆者はこれを、(1 /) と (/ 1) に挟まれた範囲、(2 /) と (/ 2) に挟まれた範囲、(3 /) と (/ 3) に挟まれた範囲、(4 /) と (/ 4) に挟まれた範囲の 4 つに区分した。つまり筆者は、(数字 /) と (/ 数字) で挟むことによりテキストを区分する目的で記号・数字をあらすじに付している。また、9 節では(数字 /) と (/ 数字) で区分された範囲に基づいた分析を行うのであるが、ここで、(数字) とは、(数字 /) と (/ 数字) で区分された範囲を表すこととする²⁴。

7.1. 「天地創造」物語

本節では物語 のあらすじを述べる。

²⁰対応の種類を判別するにあたっては恣意が介入する余地がある。この点は、本稿における方法論上の課題である。

²¹本稿では、「天地創造」物語を「物語 」、 「失樂園」物語を「物語 」、 「カインによるアベル殺害」物語を「物語 」、 「ノアの箱舟」物語を「物語 」、 「バベルの塔」物語を「物語 」とそれぞれ呼ぶことにする。

²²例えば、「創世記」9 章 20 節~27 節の「ノアによるハムへの呪い」の記事などがこれにあたる。

²³本稿では「創世記」冒頭に配置された物語のなかでも、ひとえに比較的規模の大きいものをテキストとした。当該範囲における系図や短い挿話に関する分析は別の機会に行いたいと思う。

²⁴例えば、(1) は、(1 /) と (/ 1) で挟まれた範囲を表す。

< あらすじ >

(1/) 天地創造の前、地には形がなく、神の霊が水のおもてを覆っていた。(1/1)(2/) 第一日目には、神は光を創造し、光と闇を分けた。また、光を昼、闇を夜と名付けた。第二日目には、神は大空の上の水と下の水を分けることにより、大空を造った。第三日目には、神は大空の下の水を一所に集めることにより、陸と海を造った。また、陸には植物を生えさせた。(1/2)(3/) 第四日目には、神は大空の光を分けることにより太陽・月・星を造り、昼と夜とを司らせた。第五日目には、神は空を飛ぶ鳥、水に住む動物を造った。第六日目には、神は地上に住む動物と人間を造った。また、人間には魚・鳥・動物すべてを治める権限を与えた。また、人間は男と女を造った。(1/3)(4/) こうして天・地・万象が完成し、神は第七日目に作業を終え、休息した。(1/4)

7.2. 「失樂園」物語

本節では物語 のあらすじを記す。

< あらすじ >

(1/) 神が天地を創造したとき、地にはまだ土を耕すものがいなかった。神は人を造り、エデンの園に置いた。(1/1)(2/) 神はそこに多くの種類の木々を生えさせた。神は人にエデンの園を耕させ、これを守らせた。(1/2)(3/) 神は人に善悪を知る木の実をとって食べてはならないという戒めを与えた。それとともに、人に、万物の命名権を与えた。その後、神は人のあばら骨から女を造った。人はこれに「女」と命名する。なおこれは「男からとったもの」を意味している。(1/3)(4/) 当時、その人と女は裸でいても恥ずかしいとは思わなかった。(1/4)(5/) 蛇は女に、まず、神が人に与えた戒めが本当かどうかを聞いた。それに対し、女はその戒めが神から言われたものであることを蛇に告げる。(1/5)(6/) ところが蛇は、神の戒めを否定し、その木の実を食べても死ぬことはないと告げた。女はこの蛇の言葉に従い、その木の実を食べた。さらに女は人にも与えたので人はそれを食べた。(1/6)(7/) すると人と女は自分たちが裸であることを知り、腰をイチジクの葉で隠した。また人と女は神から身を隠した。(1/7)(8/) 神は、木の実を食べたのかを人に尋ねた。すると人は、女が取ってくれたので食べたと答えた。今度は神は、女に、何ということをしたのかと言うと、蛇にだまされたので食べたと答えた。神は蛇に呪いの言葉を述べ、続いて女に、最後に人に呪いの言葉を述べた。人は女に「エバ」と命名した。なおこれは「すべて生きた者の母」を意味する。(1/8)(9/) 神は人をエデンの園から追い出し、人が作った土を耕させた。(1/9)(10/) 神はエデンの園の東側にケルビムと回る炎の剣を置き、命の木に至る道を守らせた。(1/10)

7.3. 「カインによるアベル殺害」物語

以下、物語 のあらすじである。

< あらすじ >

(1/) エバはカインを産み、その後にアベルを産んだ。アベルは羊飼いになり、カイン

は農夫となる。(11)(21)カインは農作物を、アベルは羊を、それぞれ神への供え物としてささげた。ところが、神はアベルの供え物を受け取ったがカインの供え物は受け取らなかった。(12)(31)それにより、カインは憤り顔を伏せる。(13)(41)すると神はカインに、なぜ憤るのか、もし正しいことをしているのならば顔を上げればよいということ、また、正しいことをしていないとすれば、罪を犯す気持ちを治める必要があることを述べた。(14)(51)ところが、カインは、アベルを野に連れ出し殺害してしまう。神はカインに、アベルがどこにいるかを尋ねるが、カインは知らないと言う。(15)(61)それで、神は、アベルの血の音が土のなかから叫んでいると告げ、カインは耕しても作物を得ることができず、この土地から離れなければならないと告げる。(16)(71)カインは自分の罪を負いきれないことを述べ、(17)(81)殺害されるのではと危惧するが、(18)(91)神はカインに印をつけ、殺害されないようにした。(19)(101)カインは去り、エデンの東のノドに住むことになる。(110)

7.4. 「ノアの箱舟」物語

以下、物語のあらすじを示す。

<あらすじ>

(11)ノアはその時代の人々の中で正しい人であり、セム・ハム・ヤベテの三人の子を生んだ。地は暴虐に満ちていた。(11)(21)そこで神はノアに地を滅ぼす宣言をすると同時に、ノアに対し箱舟建造の命令を下す。(12)(31)また神は、箱舟に入るべき動物や食物などに関する詳細をノアに述べ、これを箱舟に入れるように命令した。ノアは神の命令を遂行した。(13)(41)その後、洪水が起こる。雨は40日間降り続けた。(14)(51)洪水により水が地に漲り、箱舟はその水面を漂った。水嵩はさらに増し、山々さえも覆われたので、箱舟に乗り込んだノアの家族と動物たち以外、地上に生きるすべての人間や生き物は滅びてしまった。(15)(61)その後、神が心にとめられ、地の上に風を吹かせたので水は退きはじめた。箱舟はアララテ山にとどまり、山々も頂上が見えはじめた。(16)(71)その後、ノアは水が引いたかを確認するために箱舟の窓からカラスやハトを放つ。ついにノアが601歳になり、その年の2月27日に、地が乾ききったことを確認する。(17)(81)すると神はノアらに対し、箱舟から降りるよう命令する。ノアらは無事に箱舟から降りることとなった。(18)(91)ノアは祭壇を築き、燔祭をささげた。神は、二度と生き物を滅ぼさない決断をする。(19)(101)神はノアとその子どもたちと新しい契約を交わす。その後、全地の民はノアたちから出て広がることとなる。(110)

7.5. 「バベルの塔」物語

本節では物語のあらすじを示す。

<あらすじ>

(11)全地の民は同じ言葉を使用していた。人々はシナルの平野に住むようになった。

(1)(2) 彼らはレンガとアスファルトを得たので、町と塔を建て、その頂を天まで届かせようとした。また、それにより散らされないようにしようとした。(2)(3) 神はこれを見て、彼らが同じ言葉であり、すでに事を起こしたので、もはや何もこれを止められないと述べた。(3)(4) そのうえで、神は、彼らの言葉を乱し、互いに通じないようにすることを宣言した。(4)(5) 彼らは言葉が乱され散らされたので、町と塔を建てることをやめた。(5)(6) これによってこの地はバベルと呼ばれるようになった。人々はここから全地に散らされることとなった。(6)

8. 形式の確認

本節では、7節に示した物語 から のあらすじを踏まえ、当該物語に異郷訪問譚の定義を当てはめることにより異郷訪問譚の形式であるか否かの確認を行う。

8.1. 「天地創造」物語

本節では、物語 を異郷訪問譚の特徴 から と照合することにより、物語 の形式が異郷訪問譚か否かの確認を行うこととする。

特徴 : 物語 は神が天地を創造する物語であるので、主人公は神である。また物語には、神がどこか異郷を訪問する記述はない。したがって、物語 は特徴には合致しない。

特徴 : 物語 の主人公は神であり、これが訪問者であれば特徴には当てはまるのだが、この場合、主人公は訪問者ではない。よって、物語 は特徴に合致しない。

特徴 : 物語 では、神は訪問者ではないため、特殊な方法・手段による異郷への訪問もない。したがって、物語 は特徴に合致しない。

特徴 : これも同様、神は訪問者として見做せないため、選ばれた者による異郷への訪問も、物語には存在しない。したがって、物語 は特徴に合致しない。

以上より、物語 は異郷訪問譚による形式ではない。

8.2. 「失樂園」物語

続いて本節では、「失樂園」物語が異郷訪問譚であるかの確認を、異郷訪問譚の特徴から との照合により行う。

特徴 : この物語は、神がエデンの園を造り、これに人を置くが、人が戒めを破ることにより追い出されるという物語であり、終始、神の視点により物語は進行している。したがって、敢えて主人公を定めるとすれば神である。また、物語中、神が異郷を訪問する記述はないので、 の特徴には合致しない。

特徴 : 物語の舞台は終始エデンの園であるため、主人公は異郷を訪問しない。したがって、主人公は「カミ」に該当するが訪問者ではないため、 の特徴には

合致しない。

特徴 : そもそもこの物語は異郷を訪問する物語ではないので、訪問者は特殊な方法・手段により異郷を訪問することがない。したがって、にも合致しない。

特徴 : 同様、この物語は異郷への訪問が描かれたものではないため、選ばれた者による訪問という特徴もない。したがって、にも合致しない。

以上より、「失樂園」物語は異郷訪問譚ではない。

8.3. 「カインによるアベル殺害」物語

本節では、物語 を異郷訪問譚の特徴と照合する。

特徴 : 物語 は、カインが神の警告に従わずアベルを殺害する物語であるので主人公はカインである。カインはアベルを殺害するために野原を訪問する。仮にこの野原を異郷と見做せば、特徴 には合致する。

特徴 : この物語の主人公はカインであるので「人間」である。このことは、の特徴に合致する。

特徴 : カインはアベルを連れて野原を訪れるのだが、それは何ら、特殊な方法・手段に依らない。よって特徴 には合致しない。

特徴 : カインの野原への訪問は、誰かにより選ばれてのものではない。したがって特徴 には合致しない。

以上のように、特徴 ・ は合致するものの ・ は合致しない。異郷訪問譚たるためには から すべてに合致する必要があるため、物語 は異郷訪問譚とは言えない。

8.4. 「ノアの箱舟」物語

物語 を異郷訪問譚の特徴に照合してみる。

特徴 : 物語 の場合、訪問者はノアもしくは、ノアとノアに率いられた家族であり、彼らは彼らにとっての異郷に相当する山をも水で覆われた洪水の世界を訪問する。したがって、この物語は特徴 には合致する。

特徴 : 訪問者はノアであるのでこれは「人間」に相当する。よって、この物語は特徴 には合致する。

特徴 : ノアたちはノアが建造した、動物たちも入れるほどの規模の箱舟による訪問をする。これは通常な手段によるものとは言えない。したがって、この物語は特徴 には合致する。

特徴 : この物語では、ノアはまさに神に選ばれることにより箱舟を建造し、洪水を乗り切ることとなる。つまりこれは選ばれた者による異郷への訪問に相当する。よって、これは特徴 には合致する。

以上のように、物語 は異郷訪問譚の特徴 から のすべてに当てはまる。したがって、この物語は異郷訪問譚である。

8.5. 「バベルの塔」物語

物語 を異郷訪問譚の特徴と照合する。

特徴 : 物語 は、シナルでの人々の様子が描かれた物語であるので、主人公はシナルの平野に住む人々である。なお、彼らはシナルの平野に住むようになったとあるので、もともとここには住んでいなかったとも解釈できる。仮にそうであれば、人々が異郷であるシナルを訪問したと見做すことができるので、この物語は特徴 に合致する。

特徴 : 主人公はシナルの住人であるので「人間」である。これは「人間」に相当するので、特徴 に合致する。

特徴 : シナルの住人がどのような手段でシナルに住むようになったかの記載は物語にはないのだが、素直に読む限り、単に、平野があったのでそこに住むようになったと思われる。そうであれば、彼らの訪問は、何ら、特別な方法・手段によらないので、特徴 には合致しない。

特徴 : 人々によるシナルへの移動は、素直に読めば単なる移動に過ぎず、彼らが何者かに「選ばれた」とする根拠がない。したがって、特徴 には合致しない。

以上より、物語 は特徴 ・ には合致するものの特徴 ・ には合致しないので、異郷訪問譚ではない。

8.1.節から 8.5.節での一連の照合より、異郷訪問譚の形式によるものは物語 のみであり、それ以外の物語 ・ ・ ・ は異郷訪問譚ではないことが確認できた。

9. 構造の確認

本節では、物語 から に裏返し構造を適用することにより構造の確認を行う。なお、本稿の目的は、異郷訪問譚によらない形式にもかかわらず裏返し構造がみとめられる物語が存在するかを検証することにある。ここで、前節の知見から、異郷訪問譚によらない形式の物語は物語 ・ ・ ・ であるので、これらが本稿での検証対象となる物語である。これらに関する検証を行う前に、予備的検証として、異郷訪問譚である物語が裏返し構造からなることをまず確認する。

9.1. 「ノアの箱舟」物語

本節では、予備的検証として、異郷訪問譚である物語 が裏返し構造であるかの確認をする。7.4.節のあらすじに付された数字に基づき図式化を行うと次のようになる。

(1) 人々 末期的状況	⇔	(10) 人々 再生
(2) 神の決断 地を滅ぼす	⇔	(9) 神の決断 地を滅ぼさない
(3) 箱舟 入る命令	⇔	(8) 箱舟 出る命令
(4) 洪水 開始	⇔	(7) 洪水 収束
(5) 水嵩 増加 地上の生物	⇔	(6) 水嵩 減衰 鳥

ここで、(1)では地上に住む人たちは、ノアを除き、暴虐に満ちた状況である。これは、まさに末期的な状況である。一方の(10)は、ノアの家族から人々が生み増えていくことにより再生された様子が示されている。つまり、人間の「末期的状況」と「再生された状況」とは「対照」的な関係である。

続く(2)は、末期的な人々の様子を見た神がこれを滅ぼす決断を下す場面である。一方(9)では、神は、二度と人々を滅ぼさない決断を下す場面が描かれる。これも「対照」的な関係に相当する。あるいは、神が(2)で示した決断を覆し、(9)では対極的な決断をしていることから、(9)は(2)の「否定」であるとも言える。

(3)では、神はノアたちに対し箱舟に入ることを命令している。それに対する(8)では、逆に、彼らが箱舟から出ることを神は命じた。ここでの「入る命令」と「出る命令」は「対照」的な関係である。

(4)では、洪水が開始していく様子が描かれているのに対し、(7)には、洪水が収束していく様子が描かれる。つまり、洪水の「開始」と「収束」とは「対照的」関係である。

(5)は、洪水の水嵩が山々の頂を越えて行き、地の生き物が滅びる様子が書かれている。その一方で、(6)では、逆に、水嵩が減衰しはじめ、山々の頂が見えはじめる。また、空を飛ぶ鳥を飛ばせることにより、地が乾いたかどうかの確認が行われる。ここでの「生存」した「空中」を飛ぶ「鳥」は、下記のように、「絶滅」した「地上」の「全ての生物」と、「対照」的に対応している。なお、水嵩の「増加」と「減衰」も、「対照」的である。

	水嵩	生物	所在	状況
(5)	増加	全ての生物	地上	絶滅
(6)	減衰	鳥	空中	生存 ²⁵

以上を裏返し構造の特徴 A と照合すると、物語 は、「前半」部分に配置された要素 (1) (2) (3) (4) (5) に対し、それぞれに対応する「後半」の要素 (10) (9) (8) (7) (6) が、「前半」の「対照」もしくは「否定」であるので、これは、特徴 A と合致する。さらに、物語 を構成する要素は (1) と (10) (2) と (9) (3) と (8) (4) と (7) (5) と (6) がそれぞれ対応しているので、これは特徴 B と合致する。つまり物語 の特徴は裏返し構造の特徴 A と B の双方と合致するので、これは裏返し構造であると見做せる。

以上より、本節の予備的検証によれば、物語 は異郷訪問譚であり、かつ、大林(1979) が異郷訪問譚の構造上の「共通の約束」と見做した裏返し構造からなることが確認できた。

9.2. 異郷訪問譚ではない物語

8 節での検証の結果、物語 . . . は異郷訪問譚ではないことが確認できた。これを踏まえ、本節では、物語 . . . に裏返し構造が見いだせるかの調査を行う。本節での調査は、7 節に示したそれぞれのあらずじに筆者が付した数字に基づいて図式化をすることにより行うこととする。

9.2.1. 「天地創造」物語

7.1.節に示したあらずじに付した数字によれば、物語 の構造を次のように図式化することができる²⁶。

²⁵ノアにより投じられた鳥は、絶滅した世界へと送り込まれた唯一の生きた存在であり、「再生」を意味するものと思われる。

²⁶当該箇所について、いのちのことば社が 1981 年に刊行した『聖書 新改訳 注釈・索引・チェーン式引照付』(いのちのことば社(1981:1))の注釈では、第一日の「光(A)・暗(B)」と第四日の「日(A)・月日(B)」が、第二日の「大空(A)・水(B)」と第五日の「鳥(A)・魚(B)」が、第三日の「陸地(A)・植物(B)」と第六日の「動物(A)・人間(B)」が対応し、かつ、それぞれの A と B の要素どうしに対応するという解釈をしている。つまり、事実上、いのちのことば社(1981:1)では、当該箇所を並行法に基づく構造と見做している。ここで、いのちのことば社(1981:1)が指摘した第一日・二日・三日目は、本稿での(2)「創造過程」〔前半〕に、第四日・五日・六日目は、本稿での(3)「創造過程」〔後半〕に該当する。ただし、いのちのことば社(1981:1)の解釈では、(1)「神の所在と天地」〔前半〕と(4)「神の所在と天地」〔後半〕を含めた範囲には言及しておらず、当該箇所を交差対句によるものと見做していない。以上を踏まえ、本稿では、当該箇所を(1)「神の所在と天地」〔前半〕・(2)「創造過程」〔前半〕・(3)「創造過程」〔後半〕・(4)「神の所在と天地」〔後半〕という4つのブロックに区分した。

(1) 神の所在と天地	↔	(4) 神の所在と天地
神：水の表 天地：無形		神：休息 天地：完成
(2) 創造過程	↔	(3) 創造過程
一日目：光と闇 二日目：大空 三日目：陸		四日目：昼と夜 五日目：空の生き物と海の生き物 六日目：陸の生き物と人間

(1) と (4) には、ともに、神の所在と天地の状況が描かれている。(1) の場合は、神は水の表にあるのだが、(4) では神は休息している。つまり、(1) では、神の霊は水の上であり不安定な状態²⁷である。一方、(4) の休息は、じっとしている安定の状態である。つまりこれによれば、不安定と安定という「対照」的關係が成立する。また、(1) では天地には形がない。それに対し、(4) では天地は完成しているので形が定まっている。この関係も「対照」的なものである。

(2) と (3) には、ともに天地創造の過程が描かれている。まず、第一日目の光と闇は、第四日目の昼と夜に対応しており、ともに、明暗を意味するものであるが、「否定」・「対立」・「対照」²⁸的なものではない。二日目の大空は、空中のことである。また、この時点では下の水は分けられることなく存在している。つまり、二日目の時点で存在するものは空と海である。一方、五日目には空と海に住む生き物がそれぞれ造られている。この関係も「裏返し」ではない。さらに、三日目には下の水が分けられることにより陸が生じる。一方、六日目には陸に住む生き物と人間が造られる。これも「裏返し」の関係ではない。つまり、(2) と (3) の関係は「裏返し」ではない。

以上より、物語 は、(1) と (4) 、(2) と (3) が対応しており、特徴 B を満たすので交差対句ではあるが、(2) と (3) が「裏返し」ではないため、特徴 A を満たさない。したがって物語 は裏返し構造ではない。

9.2.2. 「失樂園」物語

本節では、7.2.節のあらすじ内に付された数字に基づき、物語 の図式化を行う。

²⁷いのちのこことば社(1981)の当該箇所には「神の霊は水の上を動いていた」とあり、これによれば、神は水面にあるのみでなく動いていた。

²⁸以下、「否定」・「対立」・「対照」をあわせた場合、これを便宜上「裏返し」と呼ぶ。

(1) エデンの園 人間を置く	↔	(1 0) エデンの園 人間が不在
(2) 土地 神がつくった	↔	(9) 土地 人がつくった
(3) 神の戒めと女の命名 人に戒めを与える 「女」: 生まれた側	↔	(8) 神の戒めと女の命名 戒めを破ったため呪いを与える 「エバ」: 生む側
(4) 人間の姿 裸	↔	(7) 人間の姿 腰を隠す
(5) 神の戒め 蛇による確認 女による確認	↔	(6) 神の戒め 蛇による否定 女による否定

まず(1)では、神はエデンの園を造り、そこに人を置く。それに対して、(1 0)では、神は、すでに追い出した人がエデンの園に侵入できないよう、命の木に至る道を塞いだ。つまり、エデンの園に人が侵入できないようにすることは、そこに人を置いていたことの「否定」である。

(2)では、神は、神がつくったエデンの園に人を連れて来たうえで、これを耕させる。その一方、(9)では、人がつくった土を持ち出し、それを人が耕すという記述がある²⁹。つまり、(2)の「土地」は神がつくり、(9)の「土地」は人がつくったものであるので、この点は「対照」的である。

(3)では、神は人に、「とって食べてはならない」という戒めを与える。一方(8)では、神は人・女・蛇に呪いの言葉をかける。なお、この呪いの言葉は、人が戒めを破ったことに起因しているため、(3)の戒めの「否定」が前提となる。さらに、(3)では、人が女の名前を「女」と名付けるのだが、その意味は「男からとったもの」であり、これは、女が生まれた経緯を表すものである。一方(8)では、再び、人は女の名前を付けるが、この時は「エバ」とする。これは「すべて生きた者の母」であることによるので、今度は、女が生む側の立場となる名前である。よってこの女の名前の意味は「生まれた側」(女)と「生んだ側」(エバ)という「対照」的なものである。

(4)は、人と女は裸でいても何ら恥ずかしくない状況である。それに対し(7)で

²⁹日本聖書協会が発行した『新共同訳聖書』(日本聖書協会(1987))の当該箇所には「主なる神は、彼をエデンの園から追い出し、彼に、自分がそこから取られた土を耕させることにされた」とある。

は、人と女は裸であることを知ったうえでこれを恥ずかしいと思い、イチジクの葉で腰を隠すこととなる。つまり、「恥ずかしくない」認識と「恥ずかしい」認識とは「対照」的である。

(5)では、まず、蛇が女に対し、神の戒めを確認する。女はその戒めが神によるものであることを蛇に告げる。一方(6)では、蛇は神の戒めを否定する。それとともに、女はその戒めを破ることとなる。つまり、(6)は、(5)で確認された戒めの「否定」に相当する。

以上を裏返し構造の特徴Aと照合する。「失樂園」物語の「後半」要素(10)(9)(8)(7)(6)は、それぞれに対応する「前半」要素(1)(2)(3)(4)(5)の「否定」もしくは「対照」的關係であるので、特徴Aと合致する。さらに、「失樂園」物語は、(1)と(10)(2)と(9)(3)と(8)(4)と(7)(5)と(6)がそれぞれ対応することにより構成されており、これは特徴Bと合致する。よって物語は裏返し構造である。

9.2.3. 「カインによるアベル殺害」物語

本節では、7.3.節のあらすじを踏まえ、物語の図式化を試みる。

(1) カインの所在 誕生と農夫としての生活	⇔	(10) カインの所在 追放され去る
(2) 神の受容 カイン供え物が受け取られない	⇔	(9) 神の受容 カインが殺害されないようにする
(3) 怨み 憤るカイン	⇔	(8) 怨み 殺害を恐れるカイン
(4) 罪咎 犯す前 治めることを要請	⇔	(7) 罪咎 犯した後 負いきれないことを表明
(5) 神の認知 アベルの所在を知らない	⇔	(6) 神の認知 アベルの所在を知る

(1)と(10)は、双方とも「カインの所在」が描かれている。(1)にはカインの誕生と農夫としての日常が述べられているのに対し、(10)では、カインはもともと住んでいた場所から追放され、エデンの東のノドに住むことになる。「エデンの園に住むこと」と「エデンの園に住まないこと」とは「対照」的關係である。もしくは、(1)で住むことを許された状況が「否定」されることにより、(10)で追放されたとも言える。

(2)では、神はアベルの供え物を受け取るがカインの供え物を受け取らない。これは、神がアベルを受容したことを意味する。一方、カインは神により受容されない。それに対し(9)では、神はカインに印をつけることにより、殺害されないように保護するのであるが、これは、神がカインを受容したことを意味する。つまり(1)と(9)は「神によりカインが受容されないこと」と「神によりカインが受容されること」との「対照」的な関係である。

(3)では、カインは、神により受容されないことから憤慨しアベルを怨むこととなる。一方、(8)では、カインは自分が怨まれる立場である自覚から、殺害されることを恐れている。この両者は、カインが「怨むこと」と「怨まれること」との「対照」的な関係である。

(4)は、カインが罪を犯す前の状況である。一方(7)は、カインが罪を犯した後の状況であるので、双方の状況は「対照」的なものである。また、(4)では、神はカインに対し、怨みを治めるよう要請するが、カインにはこれを治めようとする意思がない。一方(7)では、カインは自分の罰を負いきれないことを神に告白している。つまり、カインには罰を負うべき立場としての自覚があり、負う意思もあるが、それを受け止めることができていない。ここでの(4)と(7)は、カインが状況を受容しようとする意思のない状態と意思がある状態との関係であるので、両者は「対照」的なものである。

(5)では神はアベルの所在をカインに尋ねる。これは、神がアベルの所在を知らないことの表明である。一方(6)では(5)の表明を翻し、神はアベルの所在を知っていることをカインに述べる。つまり、(6)は(5)の「否定」である。

以上より、(1)と(10)、(2)と(9)、(3)と(8)、(4)と(7)、(5)と(6)の関係はすべて「対照」ないし「否定」であるので、特徴 A・B 双方を満たす。したがって物語は裏返し構造である。

9.2.4. 「バベルの塔」物語

7.5.節のあらすじを踏まえ、本節では物語の図式化を行う。

(1) 人々の所在 同じ言葉を使用 居住開始	⇔	(6) 人々の所在 言語の混乱 拡散
(2) 町と塔 建造開始	⇔	(5) 町と塔 建造中止
(3) 神の見解 中止できない判断	⇔	(4) 神の見解 中止する判断

(1)と(6)は双方とも、人々の所在を示している。(1)には人々がシナルに住み、

同じ言語を使用する様子があるが、(6)では、人々の言葉が乱された結果、シナルから散らされた様子が描かれている。この両者は「対照」的な関係である。

(2)では、人々はレンガとアスファルトを得て町と塔の建造を開始する。一方(5)では、その建造を中止する。したがって、(2)と(5)は「対照」的な関係であり、(5)は(2)の「否定」でもある。

(3)と(4)はともに神の見解であるが、(3)では、人々の活動を止めることが不可能であることを述べたのに対し、(4)ではこれを翻し、止める宣言をしている。つまり、(4)は(3)の「否定」である。

以上より、物語 は、「後半」要素(6) \ (5) \ (4)と、「前半」要素(1) \ (2) \ (3)とがそれぞれ「否定」もしくは「対照」的な関係であるので特徴Aと合致する。また、(1)と(6) \ (2)と(5) \ (3)と(4)がそれぞれ対応することにより構成されているのでこれは特徴Bと合致する。したがって物語 は裏返し構造である。

9.2.5. まとめ

9.2.1.節から9.2.4.節で得られた知見をまとめると次のようになる。

物語 は、異郷訪問譚ではない。かつ、交差対句であるが裏返し構造ではない。

物語 ・ ・ は異郷訪問譚ではない。かつ、裏返し構造である。

10. 結果と考察

大喜多(2016)では、異郷訪問譚の形式ではないアイヌ口承文芸に裏返し構造が見いだされた事例が紹介された。また、大喜多(2016)では、アイヌ口承文芸の場合、異郷訪問譚ではない物語であったとしても裏返し構造によるものが見いだされた理由を、交差対句を好むアイヌ民族の心性によるものとの仮説を提示した。本稿はこれを受け、同じく交差対句が頻繁に見いだされるテキストである聖書に注目し、アイヌ口承文芸の場合と同様、異郷訪問譚ではない形式であるにも関わらず裏返し構造が見いだされる事例があるかを確認するため、聖書の最初の巻である「創世記」の冒頭の5編の物語をとりあげての調査を行った。その際、本稿での異郷訪問譚および裏返し構造の定義を大喜多(2016)でのものと同様にした。また、3節では本稿での交差対句の定義を示し、5節では、交差対句と裏返し構造の関係性を示した。

検証の結果、まず、本稿でとりあげた物語 から の内、物語 が異郷訪問譚であり、他は異郷訪問譚ではないことがわかった。そのうえで、物語 から の構造を調査したところ、次の知見を得ることができた。

物語	異郷訪問譚	裏返し構造	交差対句
物語	×	×	
物語	×		
物語	×		
物語			
物語	×		

物語 は異郷訪問譚に分類されるので、従来の知見どおり裏返し構造であることが予想できた。実際に9.1.節で検証したところ裏返し構造からなることが確認できた。

それ以外の物語 ・ ・ ・ は異郷訪問譚ではない。そこで、9.2.節では、これらが裏返し構造であるかを調査した。それによれば、物語 ・ ・ ・ は裏返し構造であり、物語 は裏返し構造ではないことがわかった。なお、物語 から のすべては交差対句であった。

以上のように、交差対句が頻繁に見られる聖書テキストの内、本稿のテキストである「創世記」冒頭の5編では、物語 、 、 が、異郷訪問譚ではないにも関わらず裏返し構造であることがわかった。このことは、本稿1節で示した仮説を支持するものである。なお、物語 ³⁰については、交差対句ではあるが裏返し構造ではないことも併せて確認することができた。

11. おわりに

大林(1979)は、裏返し構造が異郷訪問譚の構造上の「共通の約束」であると述べたのだが、一方では、異郷訪問譚以外に裏返し構造が見られる事例があるかという点を今後の検証すべき課題とした。本稿の知見は、聖書テキストを題材とし、異郷訪問譚以外の形式での裏返し構造が見いだされる事例を紹介したものであるから、この大林(1979)の問題提起に対する検証である。

本稿の検証では、大喜多(2016)での、裏返し構造の発現に対して交差対句を好む心性が影響を与えているという仮説を支持する知見を得られたものの、大喜多(2016)での知見と併せても、調査した物語の数量は決して多いとは言えない。今後も、他のアイヌ口承や聖書テキストを対象に検証を進めて行きたい。また、アイヌ口承や聖書テキスト以外の、交差対句が頻出する特徴を持つテキストの場合はどうかという点も今後調査する必要があるだろう。筆者としては、この点に関する検証を今後進めたいと思っている。

さらに、異郷訪問譚ではない形式の物語に裏返し構造が見いだされる場合、その物語の構造にはどのような共通の特徴がみとめられるかもこれから検討すべき課題である。

³⁰これも異郷訪問譚ではない。

謝辞 * 査読者の方々には貴重なご指摘およびご意見を賜りました。また、一人の査読者からは、新約聖書「ルカによる福音書」に掲載されたイエスのたとえ話の分析は興味深いのではないかという主旨の、今後の研究主題に関するアドバイスをいただきました。ここに謹んで感謝の意を表します。

引用文献

- いのちのことば社 (1981) 『聖書 新改訳 注釈・索引・チェーン式引照付』いのちのことば社
- 大喜多 紀明 (2012) 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察：交差対句と心意」『アジア民族文化研究』11号, 181-213, アジア民族文化学会
- 大喜多 紀明 (2013a) 「上田トシを話者としたアイヌの散文説話「カラスに育てられた男の物語」についての考察：ストーリー展開と交差対句の対比」『ポリグロシア』25巻, 95-106, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明 (2013b) 「アイヌの子守歌(イヨルイカ)についての考察：心性が継承される直接的なプロセス」『京都民俗』30・31合併号, 143-158, 京都民俗学会
- 大喜多 紀明 (2014) 「アニメーション映画『千と千尋の神隠し』にみられる二重の異郷訪問話譚構造について：ミハイ・ポップの「裏返し」モデルを適用した場合」『国語論集』11号, 77-89, 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室
- 大喜多 紀明 (2016) 「アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造 異郷訪問譚によらない事例」『北海道言語文化研究』14号, 45-72, 北海道言語研究会
- 大林 太良 (1979) 「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』2号, 1-9, 日本口承文芸学会
- 勝俣 隆 (2009) 『異郷訪問譚・来訪譚の研究—上代日本文学編』和泉書院
- 加藤 泰 (1979) 「済州島の二つの神話の構造分析」『民族学研究』44巻1号, 83-90, 日本民族学会
- 左近 淑 (1971) 『詩篇研究』新教出版社
- 左近 淑 (1992) 「ルツ記の文学構造と主題」『左近 淑 著作集 第1巻』, 303-335, 教文館
- 日本聖書協会 (1987) 『新共同訳聖書』日本聖書協会
- 日本聖書協会 (1989) 『聖書』日本聖書協会
- 前川 裕 (2012) 「ヨハネ福音書7章の救済思想 物語批評の視点から基督教研究」『基督教研究』74巻1号, 71-83, 同志社大学
- 村井 源 (2009) 「マルコ福音書の多層集中構造」『日本カトリック神学会誌』20号, 65-95, 日本カトリック神学会
- 森 彬 (1996) 「ローマ書全体の集中構造について」『神学』58号, 146-178, 東京神学大学
- 森 彬 (2001) 『新・聖書の集中構造』ヨルダン社
- 森 彬 (2007) 『ルカ福音書の集中構造』キリスト新聞社
- 依田 千百子 (1982) 「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』5号, 47-57, 日本口承文芸学会
- 渡辺 和子 (1980) 「申命記法の編集 ザイツ説の検討を中心に」日本聖書学研究所 編 『聖書学論集 第15号』, 5-43, 山本書店
- Breck, John (1994). The shape of biblical language: Chiasmus in the Scriptures and beyond. St Vladimir's Seminary Press.

聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造
—異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例—

大喜多 紀明

Pop, Mihai(1990). Coordonate structurale ale folclorului literar, in Pop, Mihai & Ruxăndoiu, Pavel (eds.), Folclor literar românesc (pp.77-92).Editura Didactică și Pedagogică.

執筆者紹介

氏名：大喜多 紀明

所属：一般社団法人地域コミュニティ談話会

Email：ohkitan@yahoo.co.jp